

第15回山のトイレフォーラムから学ぶ(要旨)

2014年4月11日

山のトイレを考える会

○2014年3月8日(土) 14:00~17:30

○北海道道民活動センター「かでる2・7」。参加人数:50人

1. ボランティアによる山小屋の維持管理

■今回は設立から20年を迎えた万計山荘友の会の長水会長から講話をしていただいた。山荘の管理を元営林署から引き継ぎ、万計山荘友の会を結成し維持管理してきた苦労話である。友の会の会員は約100名。友の会による夏期シーズン中の小屋管理、建物本体の修繕、トイレの改修、冬の雪下ろし、登山道の整備、札幌市や森林管理署との交渉、そして何よりもそれを実現するための資金集めなどを全てボランティアで行っている。その活動の源泉は何だろうか。意思に賛同してくれる山仲間と募金に協力してくれる登山者、それを取り纏めて行く強いリーダーシップ。何よりも山小屋を訪れる登山者が喜んでくれることで頑張れるのかも知れない。雲上音楽会なども毎年開催して維持管理を楽しんでいるようでもある。トイレも清掃がゆき届き綺麗。浸透式から貯留式になり万計沼に大腸菌も無くなった。友の会の会員と会長はじめリーダーの方に敬意を表したい。

■ユウパリコザクラの会の河村さんからもコメントをいただいた。夕張岳ヒュッテも2008年から夕張市から管理運営を受託してボランティアでその任にあっている。募金を集め老朽化したヒュッテを昨年建て替えた。建て替え工事も全て会員のボランティア。トイレも便器から全て手作りで別棟に建てた。タンクを使った貯留式で排便した後にモミガラを撒く自前のバイオトイレ。貯留した尿は一度登山口の仮設トイレの保管槽に移送し、バキュームカーで搬出する方式をとっている。万計山荘友の会と同じように、会員の熱意に敬意を表したい。

2. 北海道のバイオトイレの現状

■北海道のバイオトイレは北海道が管理主体の黒岳トイレとトムラウシ山短縮路登山口トイレ、それに平取町管理の幌尻山荘トイレがある。

バイオトイレが全国の山岳トイレに導入されてから十数年になるが、下界ではうまく稼働しても自然環境の厳しい山岳地では車道もなく、電気も無いので維持管理が難しく、機能不全になり停止を余儀なくしている所もある。維持管理にも相当の労力がかかる。

■黒岳バイオトイレは運用開始してから10年になる。オーバーユースでバイオ機能が働かず、年6回ほどのオガクズ交換を人力で行っている。上川総合振興局の担当者をはじめ関係者の労力は並大抵ではなく早く抜本的な解決策を講じて欲しい。確信の持てる解決策が見いだせず、また費用もかかることから悩みは尽きない。それでも自然にインパクトを与えていないことは事実で、その努力に敬意を表したい。

■トムラウシ山の短縮路登山口バイオトイレは、黒岳と同じオガクズを使ったトイレであ

る。電源はソーラー。車道もあることからNPO法人による定期的な管理ができており、順調に稼働しているようである。

■**幌尻山荘のバイオトイレ**はそば殻を使っている。電気は小型水力発電。水力発電機は今まで外国製で故障が多く稼働期間が少なかった。昨年、日本製に交換してからバイオトイレも順調に運用できている。しかし、1基しかないため処理可能な人数も限られ、小屋内トイレや屋外仮設トイレを利用せざるを得ない。そのため2005年から毎年、日高山脈ファンクラブが主体となって排泄物の人力による担ぎ下ろしをボランティアで実施している。昨年で9年目。延べ333名で約4トンを超える排泄物を担ぎ下ろした。

以前は、小屋周辺に散布して処分していたが、担ぎ下ろしを開始してから排泄物による自然環境は守られていることになる。登山口にも簡易トイレが2基設置されているが、これらの管理費用、担ぎ下ろしの費用の多くがファンクラブが獲得した助成金で賄っている。

担ぎ下ろしを永続的に実施できる保証はない。山荘宿泊費を値上げする等で搬出する人件費やヘリ運搬費を捻出する受益者負担を検討していただきたい。

■フォーラムで北大山スキー部OBの方から発言があった。**無意根小屋のトイレ**が傾いてきているので、バイオトイレ導入を検討しているがどのような方式がいいかと言うものだった。電気も車道もない場所。土壌処理方式を検討したが見積額が高くて、オガクズ方式を検討していると事だった。バイオトイレの設計にあたっては利用者数の見込みを正確に導き出すことが重要である。小屋の設置場所は日陰になる部分もありソーラーは無理そうである。安定的な電源確保と定期的な管理が必須のバイオトイレは適さない感じがする。発言者から貯留式カートリッジ型トイレにして、春の残雪期に排泄物が入ったカートリッジをソリに乗せ登山口まで人力で運び、札幌市のバキュームカーで搬出するアイデアが披露された。少ないコストで出来そうでこれは検討に値する方法と感じた。

3. 携帯トイレの利用促進について

■**利尻山**では2000年から携帯トイレを導入した。利尻富士町と利尻町、そして環境省、地元の住民が協議して携帯トイレ導入の仕組みを考え、実行して成果を上げている。全国的にも携帯トイレ導入の先進地となっている。これも利尻山をし尿で汚したくない、綺麗にしたいと言う島民の熱意があったからできたと思う。日本百名山であることから一生に一度しか登らない人が多く、また、町の担当者や環境省の自然保護管が人事異動で変わることから、継続的な広報と島民の皆さんの支援が課題となる。登山シーズン前後の年2回、関係者が集まって振り返りと課題の整理、対策について検討し取り組んでいくと言う。

■世界自然遺産に指定された**知床(羅臼岳)**も山中にトイレは無い。利尻山に続き2008年から携帯トイレの利用促進施策をスタートした。回収ボックスの設置、ホテル等での携帯トイレの有料販売、登山者への広報に取り組んだ。野営指定地である羅臼平はいつも排泄物やトイレ紙が散乱している。これを何とか無くしたいものだ。昨年、銀嶺水に木製の固定式携帯トイレブースが設置された。導入後の効果に期待したい。

■アポイ岳も昨年から携帯トイレに取り組みだした。アポイ岳ファンクラブが中心となり、様似町の財政支援で5合目にテント式携帯トイレブースを2基設置した。また有料の携帯トイレもビジターセンターで用意した。回収ボックスも登山口に設置して体制が整いつつある。昨年はシーズン最盛期（5月下旬～6月中旬）が過ぎた6月18日に携帯トイレブース設置と遅れたが62個回収した。今年は4月上旬の山開きに合わせ設置したいとのことだった。北海道では利尻山、知床に続き3例目。排泄は何とか我慢できる山であるが、幼稚園児や小学生の学校登山も多い。今後の取り組みに期待したい。

4. 美瑛富士避難小屋トイレ問題の解決に向けて

■山のトイレを考える会では2000年の設立当時から美瑛富士避難小屋トイレ問題解決に向けて取り組んできたが、この14年間何も前進していない。当会は山のトイレデー等で清掃登山を何回も実施しているし、いろいろな山岳会等でも清掃に協力してくれている。どのようなトイレが適しているのか案も提示した。しかしトイレ設置はいろいろな面でハードルが高いと感じ、次善の策として携帯トイレの導入について検討している。そのために、まず携帯トイレブースを野営地に設置し、回収ボックスは白金温泉観光センターに設置。また登山口に工事用の仮設トイレを設置する。そのために登山者に携帯トイレを使うようお願いする看板を登山口や小屋の前に立て周知する。各種メディアやウェブサイト、チラシ配布等で最大限の広報も行う。トイレブースは環境省に設置してもらう。回収ボックスは美瑛町に設置してもらい、使用済み携帯トイレの処分もお願いする。登山口トイレの設置は森林管理署で、し尿の処分は美瑛町にお願いする。

■課題は維持管理。ブースも定期的にキチント維持管理しないとトイレと同じで汚くなる。その維持管理を札幌でもどこでもいいが、各山岳会、年1回分担して清掃する仕組みはできないか。現在は美瑛山岳会が避難小屋や登山道を変な労力をかけて維持管理している。携帯トイレブースの維持管理を担保できるなら環境省でブースを建ててもいいと過去に聞いた覚えがある。そのようになった場合、美瑛町は了承してくれるのか。いろいろと解決しなければならない課題も多いが、実施に向け本格的に検討していきたい。

■札幌の勤労者山岳連盟に所属する参加者から“札幌の登山者は地方の山に登り少なからず自然にダメージを与えている。登山道整備も地元山岳会等にまかせきり。山岳会はたくさんあるが札幌近郊の山で笹刈り等の登山道整備もしていない。今後、札幌の山岳会も登山道維持や山のトイレの清掃等に携わっていかねばならないと感じている”との心強い発言があった。

■美瑛山岳会の参加者から、携帯トイレ導入を本格的に進めるためには、環境省、森林管理署、北海道庁、山岳会、山のトイレを考える会等の関係者が協議をして施策実施の合意を得てから美瑛町の上部に要請しないと前に進まない旨の発言があった。これらの意見を踏まえ課題を整理、戦略を練り実現に向け動きだしたい。

（文責：山のトイレを考える会 仲俣）